

令和 2 年 9 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H01818

研究課題名(和文)状況に埋め込まれた知としての「わざ」に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on 'Waza' as Knowledge Embedded in Situations

研究代表者

浅田 匡 (Asada, Tadashi)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00184143

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教師及び看護師の持つ「わざ」を記述し、その伝承・教育の方法を開発することを目的とし、教師及び看護師の「わざ」へのアプローチとして机上シミュレーション法を開発した。いずれにおいても、どのように臨床判断が行われているかが明らかになっただけでなく、判断過程を含めた「わざ」の教育方法としての有用性が示された。それらに基づき、コーチング、リフレクション、シミュレーション教育、work-based educationといった教育・研究を行っている海外研究者を招聘、「『わざ』はいかに学べるか」をテーマとした国際カンファレンスを開催し、その結果、教育及び看護に関する「わざ」研究の拠点の構築ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師と看護師の「わざ」への研究アプローチとして机上シミュレーション法を開発したことは、様々な状況に対応しなければならない専門家の教育方法等の開発に寄与する。また、「わざ」を鍵概念に看護教育と教師教育とが協働し、適応的熟達化が求められる専門家教育という研究領域を創出した点にも学術的意義がある。また、学校教育、看護教育に限定はされるが、「わざ」習得の教育プログラムの開発に欧米、アジア、オセアニアの研究者との連携が確立されたことは、高度職業人育成という点からの高等教育改革にも意義あると思われる。以上のように、教育・研究拠点の構築あるいは研究グループの構成ができた点は社会的な意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to describe the features of teachers' and nurses' 'waza(crafts/skills)' and to develop a method of handing down and teaching 'waza'. We developed a desktop simulation method as an approach to the 'waza' of teachers and nurses. In each case, not only was it found how clinical judgement by teachers or nurses in their practice, but it was also shown to be useful as a method of teaching 'waza' including the clinical judgement process. Based on these research findings, we held the international conference with the theme "how people learn 'waza'" inviting five overseas researchers who are engaged in educational research such as coaching, reflective nursing, simulation education, and work-based education. As a result, we have been able to build a research base for 'waza' research in teacher and nurse education.

研究分野：教育工学

キーワード：わざ 机上シミュレーション 教師教育 看護教育 リフレクション コーチング work-based education

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ものづくりの「わざ」の伝承と同じく、対人関係における「わざ」の伝承は学校教育、看護教育において重要な課題である。対人関係での「わざ」はその状況における判断過程を含むため、そのわざを教えることはきわめて困難であり、授業実践力の育成や看護実践力の育成という現代的課題の中心テーマと位置づけられよう。しかしながら、「わざ」の定義は必ずしも明確ではなく、G.ライルによる knowing how と knowing that の検討から、「わざ」を知識、あるいは「知ること」から捉えられる研究が1つの大きな流れとなっている。その流れの中で教育や看護という人を対象とした専門家が用いる「わざ」を支える知のあり方が問われてきている。

しかしながら、その知をどのように捉えるかという方法は、観察と自己報告、あるいはインタビューの組み合わせで行われてきた。これらの方法は授業中の思考過程を捉えるというよりも、授業後の振り返りによって可能な限り授業中の思考を再現しようとする方法であると言える。しかし、授業中の教授行動と関連づけて授業者自身の思考過程を捉える研究方法は、教師の思考研究においてはほとんど行われてこなかったと言え、教室の相互作用における教師の思考や看護場面における看護師の思考を十分に捉える研究方法は開発されてはいないと言える。

また、教師教育の視点から、教授スキルの習得をはじめ、多様な教員養成プログラムが実施されてきたが、成功してきたとは言い難い。それは技術熟達者モデルに基づくプログラムの開発概念に基づいたためと考えられる。反省的实践家モデルに基づいたプログラムは、長い実習期間とそこでの振り返りということが中心であり、経験の重要性が主張されているにすぎず、そこにアクションリサーチやセルフスタディが組み込まれている。しかしながら、経験重視のプログラムがなぜ有効であるのかは明確ではない。教師の授業実践力に関する研究が教育プログラムにうまく変換できていないということであろう。看護教育においても、患者の心身への侵襲という問題があるにせよ、リアリティ・ショックの問題は、看護実践力が看護師養成段階において培われていない証左であるだろう。また、教師教育以上に臨地実習が長期にわたり行われている看護教育においても、看護場面で機能する看護技術教育は久しく課題とされている。

最後に、本研究において教師と看護師を対象とするのは、いずれの職能発達モデルも Dreyfus らの Novice から Expert への段階を踏むモデルとして示されてきたことにある。それは、人を対象とした専門家のわざの習得および熟達過程は類似しているということであり、両者を比較検討した研究は見られないが、それによって実践家の知、すなわち状況に埋め込まれた「知」としてのわざが明らかにされると思われる。

2. 研究の目的

本研究は、人を対象とする専門家である教師及び看護師が持つ「わざ」の記述とその「わざ」の伝承(教育)方法を開発することを主たる目的とした。「わざ」をどのように定義するかは大きな問題ではあるが、本研究では、教師あるいは看護師が用いる「わざ」は状況と密接な関連があり、具体的な状況においてどのような行為を行うかという高次な状況判断と行為に関する知識(knowing how)とが結びついた「知」と捉え、研究を行った。具体的な目的とは以下の通りである。

(1) 教師及び看護師のわざを捉える研究方法を開発し、その方法の有用性を検証する

机上授業をベースとした3D フィギュアを用いたシミュレーション技法をベースに開発を行う

(2) これまでの教授スキル、看護技術研究をレビューし、わざ伝承プログラムを開発し、そのプログラムの評価によってわざ概念の検討を行い、教師及び看護師の知の特徴を明らかにする

3. 研究の方法

(1) 教師教育及び看護教育における「わざ」の教育に関する文献レビュー及び Web 情報の内容分析

(2) 机上授業に基づく机上シミュレーション法を開発し、シミュレーション法による教師及び看護師の思考過程を録画、録音及びインタビューによる内容分析

4. 研究成果

研究を進めるにあたり、学校教育、看護教育の固有性を踏まえ、それぞれの領域で研究を進めたため、それぞれの領域ごとに成果を示す。

[看護教育]

看護教育において、看護師の「わざ」がどのように捉えられてきたかを概観するために、看護における「わざ」に関する研究論文のレビューを行ったが、「わざ」の定義に関しては必ずしも合意を得られる定義を明らかにできなかった。一方、我が国において看護師が捉える「わざ」を明らかにすることを目的とした比喩生成課題による調査を行った。対象は、学生や新人看護師に教える機会があり、自らも看護の実践者である臨床の看護師である。その結果、看護のわざは《看護の匠としての特徴》《経験を積み重ねる中で自己と統合するもの》《流動的に見えないもの》《“生命を守る”ことの特徴》として捉えられていることが明らかになった。また、看護の「わざ」を伝える工夫を自由記述で求めたところ、《自分が大切にしているモットーを伝える》《患者中心の看護実践のための具体的方法を伝える》《自分の指導経験から得た気づきを生かす》《自分の看護経験を生かした方法》《自分の看護を見せる・伝える》《双方向性の指導》といった工夫が示された。

これらの研究を踏まえ、看護の「わざ」は経験を積み重ねる中で自分自身の看護への考え方や技術として再構成されていくことによって形成されるという点が重要であると考え、看護師が日々経験しているそれぞれの看護師の行為と思考が現れる「臨床判断」に着目し、開発した机上シミュレーション法を用いて臨床現場ではその時その場の看護師の思考を把握することを試みた。対象は、看護師 5 名(30 歳代~40 歳代、臨床経験 10 年~25 年、女性)である。机上シミュレーションを行っている状況での発話記録を分析した結果、臨床判断には、各々の看護師がこれまでに経験してきた個別具体的な看護実践と、その看護実践を通じて培ってきた知識および技術が大きく影響していることが明らかになった。具体的には、A 看護師は予想外の出来事から生じた緊張感を抱きつつも、声をかけながら患者を観察することで状況を捉え直し、過去の経験を生かしながら患者に必要な看護を見出しただけでなく、周囲の患者を考慮しながら看護を実践しており、この全体を捉える視点(俯瞰的視点)は、同時に多数の判断が求められる臨床現場において、看護師の臨床判断を培う上で重要であると言える。さらに、本研究の発展として経験豊かな B 看護師を対象に机上シミュレーション法による臨床判断を明らかにした。その結果、B 看護師は 4 場面で臨床判断を示した。輸液療法による鎮痛効果がなく点滴抜去を訴える患者の状況を受け止める場面において、以下のような臨床判断を示した。

B 看護師は訪室時、患者から腹痛が和らがないと言われ、腹痛の状態を観察した。すると突然、患者から症状が改善しないため点滴を抜いてほしいと強い口調で訴えられ驚いた。観察だけでは状態を十分に把握できないため、直ちに点滴は抜けないと考えたが、同時に患者の苛立った口調から「(点滴を)抜いて欲しい希望が思っている以上に強い」と感じた。さらに B 看護師は、点滴を抜くと治療の継続が出来ないため、「何で(痛いのに患者は点滴を)抜いて欲しいのか」、これまでの臨床経験と観察した内容を踏まえ、今後痛みが増強する危険性を考えた。看護師フィギュアを患者フィギュアに少しずつ近づけ、輸液療法の継続を丁寧に

説明し始めた。患者の状態を捉えつつ、まずは患者の話を聴くことで落ち着いてもらい、状況を受け止める必要があると判断していた。

このように、現実の複雑な臨床現場での臨床判断をシミュレーションできることから看護師の臨床判断を培うことに机上シミュレーション法は有用であることが示唆された。また、看護の「わざ」の伝承(教育)という視点から、2019年度は看護学生に臨床で看護実践を教える役割を持つ「臨地実習指導者」に焦点を当て、臨地実習指導者が看護学生にどのように看護実践を教えているのか、その教育的判断過程を明らかにするために机上シミュレーション法を用いた研究を行った。臨地実習指導者が学生に看護を教えるための教育的判断過程は、複雑で多様でありながら瞬時に、そして常に学生にとってのよりよい看護実践と教育実践に向けられていた。すなわち、看護実践と実習指導とは不可分な関係であることが明らかとなった。看護の「わざ」の伝承(教育)方法として、机上シミュレーション法の有用性があると考えられた。

さらに、看護の「わざ」の教育がどのように行われているかを明らかにするために、看護におけるシミュレーション教育の専門家の招聘、イギリス オックスフォードブルックス大学におけるリフレクティブ・ラーニングの大学教育の枠組みと実践の参観、アメリカ デンバー大学及び近隣の病院における新任看護師の教育研修システムの視察を行い、「リフレクション」が重要な鍵概念であることが明らかになった。

[教師教育]

教師教育では、我が国の教員養成プログラムにおける特徴を明らかにした。大学教育学部の Web ページを資料として、特徴的なプログラムあるいは活動を抽出し、その共通点を検討した。その結果、教育実習生の学校を中心とした教育現場での経験の量と質が主に問題とされていた。したがって、教師の「わざ」の教育においても経験が鍵となることが示唆された。

教師の授業における経験やその経験に基づく思考(リフレクション)を探るために、いくつかの方法を用いた。第1に、ウェアラブル・カメラの利用である。授業中における視野、視線の情報をウェアラブル・カメラに記録し、その映像を用いたリフレクションをよって教師の思考を捉えた。この方法による研究の1つは、家庭科の調理実習について新任教師と熟練教師との動線と視線との関連の相違点を明らかにした。その結果、新任教師は調理実習において机間指導の動線は各班を順番に巡るが、熟練教師は問題があると判断される班を中心に机間指導を行うこと、また熟練教師は班での指導を行いながら教室全体を見ろということを行っていることが示された。あと1つは、附属小学校教師、教育実習生、教職大学院 実務家教員、教職大学院生を対象としたウェアラブル・カメラの映像を用いたリフレクション研究である。その結果、授業過程において教師が着目する対象、すなわち視野の範囲や視線は多様であった。加えて、リフレクションの内容は視線が向けられた対象からの情報だけでなく、子どものつぶやきなど、他の情報も用いて思考していることが示された。したがって、映像に記録された教師が見ていることにさらに他の情報を加えて教師は思考していることのために、教師の授業の「みえ」が多様であると考えられる。

また、教師の「わざ」に強く関連する教師の思考として reflection-in-action が鍵になるが、その研究方法として机上シミュレーション法を開発した。机上シミュレーション法は、経験教師、特に同一学校の経験教師が子ども役を担い、授業者の予想を超えるような反応を示すことにより、reflection-in-action を生起させそれを言語化させるという方法である。本研究では、新任の小学校教師5名を対象とした。その結果、新任教師の予想外の反応に対する反応は多様であったが、少なくとも2つの側面から reflection-in-action が行われていた。1つは教材内容

の理解を中心とした教授面である。あと1つは子どもへの心理的な影響,あるいは学級経営的な側面である。この2つの側面を両全することは難しく,新任教師は葛藤状況に陥っていた。また,予想を超える子どもの反応に対して reflection-in-action が生起しない教師も存在した。その原因として,指導計画作成時点での子どもの反応予測ができていないこと,さらには子ども理解が不十分であることなどが考えられた。さらに,reflection-in-action において,予想外の反応の場面だけではなく,それまでの授業過程との関連で思考する新任教師も存在した。以上のように,新任教師を対象としただけであるが,机上シミュレーション法が教師の reflection-in-action を記述する方法として有用であることが示唆された。加えて,机上シミュレーションを行った後,教室実践において指導計画を含め新任 教師の大きな変容がみられた。このことは,机上シミュレーション法が教師教育のツールとしての可能性を示したと考えられる。

教師の「わざ」の教育がどのように行われているかについて,海外での状況の調査を行った。ニュージーランドにおけるメンタリング研究と Amesbury School におけるコーチング研修,アメリカ デンバー市教育委員会による大学院プログラムとしての現職教師に対するメンタリング制度,タイ パンヤーピアット経営学院における work-based education による教師教育及びタイの小・中学校におけるメンタリング,スーパーバイズ,を対象とした。これらを踏まえて,教師の「わざ」教育の主たる方法として,1)メンタリングとコーチング,2)Lesson Study による Professional Learning Community,3)フィールド経験と大学教育との統合(work-based education)といった方法が主となることが明らかになった。

これらの研究成果を踏まえ,最終年度に東京と神戸で国際カンフェランスを開催した。その趣旨は以下に示すとおりである。

本カンフェランスは,教師や看護師など人を対象とした専門職の持つ「わざ」をどのように明らかにし,そしてその「わざ」いかに教えるあるいは伝えるか,を課題に取り組んできた研究成果の発表とそれに関連する国際的な研究交流の場を設け,さらなる「わざ」研究の発展を図るものである。

海外からは訪問した研究機関を中心に研究者を招聘し,シンポジウム,ワークショップを開催し,海外での「わざ」の教育方法の共有化を図った。また,本研究で行われた研究に加え,「わざ」に関連する国内研究者の研究発表に対する評価も行い,「わざ」研究の研究グループの構築を図った。いずれも参加者はほぼ100名であり,国際カンフェランスの目的は達成されたと評価できる。

最後に,本研究期間内ではパイロット・スタディのレベルではあるが,開発された机上シミュレーション法を保育に適用し,幼稚園教師の「わざ」である動線と思考との関係を探ることも行った。小学校授業における机上シミュレーション法では,教師の動きや子どもの動きを扱うことが難しく,シミュレーションの特徴が必ずしも活用できていないという点から動きの大きい保育への適用を試み,机上シミュレーション法の有用性の拡大を志向した。加えて,360°カメラを用いることで教師や看護師が「わざ」を用いる状況判断(臨床判断)との関係をより詳細に分析できる可能性を見出した。これらの取り組みは,「わざ」研究の方法の開発という点からも今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 姫野完治, 長谷川哲也, 益子典文	4. 巻 22
2. 論文標題 研究者教員と実務家教員の大学における役割と教師発達観	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師学研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河村美穂	4. 巻 31
2. 論文標題 人とヒトが食でつながるといことの意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会	6. 最初と最後の頁 78-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田菜摘, 浅田匡	4. 巻 22
2. 論文標題 学校研究としての校内研修の若手教師の変容に対する機能	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教師学研究	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村駿, 浅田匡	4. 巻 17(4)
2. 論文標題 机上授業シミュレーションを用いた教師の行為の中の省察に関する事例研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治	4. 巻 1
2. 論文標題 教育工学的アプローチによる授業研究と教師教育研究の動向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会SIG-02教師教育・実践研究レポート	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治	4. 巻 1
2. 論文標題 実践の対象化と省察をつなぐ授業研究法の開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会SIG-02教師教育・実践研究レポート	6. 最初と最後の頁 21-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河村美穂	4. 巻 1
2. 論文標題 ライフストーリーの記述方法と分析視点, ライフストーリーから読み解く家庭科教師の成長	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『9つのライフストーリーにみる家庭科教師のくらしとキャリア』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治	4. 巻 40(Suppl.)
2. 論文標題 教師の視線に焦点を当てた授業リフレクションの試行と評価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村駿、浅田匡	4. 巻 40(1)
2. 論文標題 写真スライド法による教師の授業認知に関する研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 241-251
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村駿・浅田匡	4. 巻 41(4)
2. 論文標題 オン・ゴーイング法による授業認知に基づく授業者の行為の中の省察に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 477-487
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村駿・浅田匡	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 Schonの省察概念による教師の省察研究の再検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田菜摘・浅田匡	4. 巻 43(4)
2. 論文標題 小中学校教師は校内研修をどのように捉えているか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 447-456
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田仲誠祐, 佐藤学, 鎌田信, 細川和仁, 秋元卓也	4. 巻 41
2. 論文標題 教員養成指標に基づくアンケート調査による小学校初任者教員に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanji Himeno	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 Recent Trends of Research on Classroom Instruction and Teacher Education based on Educational Technology Approach	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Educational Technology Research	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 姫野完治, 水上丈実, 梅本宏之, 橋本忠和	4. 巻 10
2. 論文標題 コンピテンシー・ベースのカリキュラム・マネジメントを中核とした教職大学院の授業開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計40件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 瀬川朗, 河村美穂
2. 発表標題 ナラティブ・アプローチによる家庭科教師のカリキュラム・デザインと私的生活経験の関連の検討
3. 学会等名 日本家庭科教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田菜摘, 浅田匡
2. 発表標題 校内研修に対する現職教師の認識とその規定因に関する一考察
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 改発智也, 前田菜摘, 中村駿, 浅田匡
2. 発表標題 Web情報に基づく授業のわざの習得からみた教員養成プログラムの現状
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村駿, 浅田匡
2. 発表標題 ICTを活用した授業における教師の授業設計の特徴に関する研究
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白濱郁子, 岡本朋子, 前川幸子
2. 発表標題 看護師の臨床判断を培うための机上シミュレーション教育(その2)
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kanji Himeno
2. 発表標題 Recent trend of research on teacher education and lesson study in Japan
3. 学会等名 The 2017 AECT International Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姫野完治, 細川和仁
2. 発表標題 熟練教師には授業中に何が見えているのか? 主観カメラを活用した視線と認知的枠組みの分析
3. 学会等名 日本教育工学会第33回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瀬川朗, 河村美穂
2. 発表標題 家庭科教師の意図するカリキュラムと私的生活経験
3. 学会等名 日本家庭科教育学会第60回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miho Kawamura
2. 発表標題 The Role of Mentoring? for Home Economics Teachers in Japan
3. 学会等名 Transforming together: Coaching and Mentoring Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河村美穂, 若月温美, 瀬川朗
2. 発表標題 ライフヒストリーにおけるエビファニーからみる教師の成長
3. 学会等名 日本教師学学会第19回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白濱郁子, 岡本朋子, 前川幸子, 大和愛実
2. 発表標題 看護師の臨床判断を培うための机上シミュレーション教育 - A看護師の判断過程の分析を通して -
3. 学会等名 日本教師学学会第19回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kanji Himeno
2. 発表標題 Study of research on classroom instruction which focused on teacher's eye movement
3. 学会等名 The Eighth Pacific Rim Conference of Education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tadashi Asada
2. 発表標題 The Role of 'Outside' Mentoring Practice in On-going Cognitive Intervention
3. 学会等名 European Conference for Educational Research (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tadashi Asada
2. 発表標題 The mentor's role of 'outside' mentoring in on-going cognitive intervention
3. 学会等名 Transforming together: Coaching and Mentoring Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 浅田匡
2. 発表標題 授業に関する「わざ」概念の検討
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡本朋子, 前川幸子, 脇坂豊美
2. 発表標題 看護師が捉える「看護のわざ」についてのイメージ-比喩生成法による表現を通して-
3. 学会等名 日本教師学学会第19回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikuko Shirahama
2. 発表標題 Educational Judgement Process for Clinical Nursing Practice Instructors in Teaching Practical Nursing -Using Tabletop Simulation-
3. 学会等名 International Conference How People Learn 'Waza' From the Educational Field of Teaching and Nursing (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoya Kaihatsu, Tadashi Asada
2. 発表標題 The Relationship between Understandings of Students and Lesson Management of the Elementary School Teacher during One School Year
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies International Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoya Kaihatsu, Tadashi Asada
2. 発表標題 Reconsidering teacher behaviors: the eye of classroom management in elementary school teachers
3. 学会等名 World Association of Lesson Studies International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoya Kaihatsu, Tadashi Asada
2. 発表標題 The Complex Process of Teaching from the Perspective of Gakkyu-Keiei beyond Classroom Management
3. 学会等名 International Conference How People Learn 'Waza' From the Educational Field of Teaching and Nursing
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村駿・浅田匡
2. 発表標題 リフレクションとは何か
3. 学会等名 第32回日本教育工学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村駿・浅田匡
2. 発表標題 授業における教師のICT活用と学校の情報化との関連
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shun Nakamura, Tadashi Asada
2. 発表標題 Capturing Reflection-in-action Using Desk-top Teaching Simulation
3. 学会等名 13th World Association of Lesson Studies International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shun Nakamura
2. 発表標題 Desk-top teaching simulation for capturing and promoting teachers' reflection-in-action
3. 学会等名 International Conference How People Learn 'Waza' From the Educational Field of Teaching and Nursing (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田菜摘, 浅田匡
2. 発表標題 校内授業研究に対して各教師が抱いているイメージと期待に関する研究
3. 学会等名 第32回日本教育工学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Natsumi Maeda, Tadashi Asada
2. 発表標題 Identifying Teacher's Professional Vision in Elementary School Teaching
3. 学会等名 European Conference for Educational Research
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Natsumi Maeda, Tadashi Asada
2. 発表標題 What and how do young teachers learn form Kounai-ken?
3. 学会等名 European Conference for Educational Research
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Natsumi Maeda, Tadashi Asada
2. 発表標題 A change of pre-lesson discussion in lesson studies as year-long collaborative inquiry
3. 学会等名 13th World Association of Lesson Studies International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Natsumi Maeda
2. 発表標題 How did the pre-lesson discussions of Kounai-ken change in one year? From a case of a Japanese elementary school
3. 学会等名 International Conference How People Learn 'Waza' From the Educational Field of Teaching and Nursing
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 姫野完治
2. 発表標題 教師視線カメラを活用した授業研究デザイン
3. 学会等名 第32回日本教育工学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 姫野完治, 細川和仁
2. 発表標題 主観カメラを活用した授業者と授業観察者の視線分析(1)
3. 学会等名 第18回日本教師学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姫野完治
2. 発表標題 授業実施中の教師の「みえ」の基盤となる認知的枠組みの分析
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野正樹, 青木優汰, 姫野完治
2. 発表標題 教職経験年数による授業参観時のみえはどのように違うのか
3. 学会等名 第21回日本教師学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 光内亜理沙, 姫野完治
2. 発表標題 教職大学院生による授業中のみとりの解明と変容
3. 学会等名 第21回日本教師学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細川和仁
2. 発表標題 教育実習生と実習指導教員の授業認知の比較：教師の待ちや時間感覚に着目して
3. 学会等名 第60回日本教育心理学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 細川和仁
2. 発表標題 授業に対する教育実習生の意識－教師が「待つ」ことを中心にした事例研究－
3. 学会等名 第19回日本教師学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 細川和仁, 姫野完治
2. 発表標題 授業における教師の「待つ」行為に関する一検討
3. 学会等名 第53回日本教育方法学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 細川和仁, 姫野完治
2. 発表標題 熟練教師と教職志望学生の授業の「みえ」の比較 主観カメラを活用した視線と認知枠組みの分析
3. 学会等名 第33回日本教育工学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 細川和仁, 姫野完治
2. 発表標題 主観カメラを活用した授業者と授業観察者の視線分析(2) - 指導教員の授業を見る教育実習生の授業認知の比較研究 -
3. 学会等名 第18回日本教師学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 姫野完治, 細川和仁
2. 発表標題 熟練教師は授業中に何がみえているのか?
3. 学会等名 第33回日本教育工学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 姫野完治	4. 発行年 2019年
2. 出版社 一莖書房	5. 総ページ数 278
3. 書名 教師のわざを科学する	

1. 著者名 姫野完治	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 214
3. 書名 授業研究のフロンティア 授業研究の歴史	

1. 著者名 浅田匡	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 214
3. 書名 授業研究のフロンティア 授業研究のアプローチ	

1. 著者名 姫野完治	4. 発行年 2017年
2. 出版社 図書文化	5. 総ページ数 -
3. 書名 「教育のスタンダード化と教師教育の課題」『学習指導要領の改訂に関する教育方法学的検討』	

1. 著者名 姫野完治	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 「学びを深める授業研究」『教育の方法と技術』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河村 美穂 (Kawamura Miho) (00361395)	埼玉大学・教育学部・教授 (12401)	
研究分担者	前川 幸子 (Maekawa Yukiko) (30325724)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授 (34507)	
研究分担者	細川 和仁 (Hosokawa Kazuhito) (30335335)	秋田大学・教育文化学部・准教授 (11401)	
研究分担者	姫野 完治 (Himeno Kanji) (30359559)	北海道教育大学・大学院教育学研究科・准教授 (10102)	
研究分担者	田村 由美 (Tamura Yumi) (90284364)	日本赤十字看護大学・看護学部・教授 (32693)	
研究協力者	中村 駿 (Nakamura Shun)	早稲田大学・人間科学学術院・助手	
研究協力者	前田 菜摘 (Maeda Natsumi)	早稲田大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程	
研究協力者	改発 智也 (Kaihatsu Tomoya)	早稲田大学大学院・人間科学研究科・博士後期課程	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	白濱 郁子 (Shirahama Ikuko)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・助手	2018年度より甲南女子大学大学院看護学研究科博士前期課程に所属
研究協力者	岡本 朋子 (Okamoto Tomoko)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師	